

【研究ノート】

『観無量寿経集註』と『浄土和讃』観経意

青木玲^①

はじめに

『観無量寿経集註』とは、『観無量寿経註』とも呼ばれる、親鸞真筆の卷子本（巻物）である。本書には、『観無量寿経』が書写され、それに対する註釈文が、善導の『観経四帖疏』を中心に、『往生礼讃』・『観念法門』、そして、曇鸞の『浄土論註』、宗暁の『楽邦文類』が記されている。これらの註釈文は、（一）経文の行間、（二）経文の上欄外、（三）経文の下欄外、また裏面に配置されている。裏面は、（四）経言の真裏の位置に記される場合と、（五）紙の上から下にかけて記される場合がある。以上をまとめると、次のようになる。

・表面 経文

註釈文（一）経文の行間

（二）経文の上欄外

（三）経文の下欄外

・裏面 註釈文（四）経言の真裏の位置

（五）紙の上から下

『観無量寿経集註』は、もともと『阿弥陀経集註』と一卷であったが、現在は『観無量寿経集註』と『阿

『弥陀經集註』に分けられている^②。この二つの『集註』には、善導の五部九卷という著作の中で『般舟讃』の文だけが記されていない^③。『般舟讃』は、建保五（一二一七）年、親鸞四十五歳の時に発見されて流布したことから、『観無量寿経集註』はおおよそ親鸞が法然のもとにいた時期（二十九歳～三十五歳）に作られたものと言われている^④。

したがって、本書には、若き親鸞の『観無量寿経』の学びの跡が確認できる。それは、善導の『観経四帖疏』を通した学びであり、具体的に言えば、

「仏告阿難 汝好持是語」より已下は、正しく弥陀の名号を付嘱して、退代に流通することを明かす。

上よりこのかた定散両門の益を説くといえども、仏の本願の意を望まんには、衆生をして一向に専ら弥陀仏の名を称せしむるにあり、と。
（『観経四帖疏』「散善義」・『真宗聖典』三五〇頁）

と述べられるように、阿弥陀仏の本願に基づく学びである。しかし、「自習の書」^⑤、「研学のための備忘に類するもの」^⑥などと言われ、親鸞の解釈は示されていないと指摘されている^⑦。確かに、親鸞自身の文は記されていないため、そのようにも考えることができるが、はたしてそう言い切っていだろうか。『観無量寿経集註』に記されている註釈文の順序や位置などを見ていくと、親鸞の意図と言ってもいい展開が見られるのではないだろうか。それが、『観無量寿経集註』の約四十年後、親鸞七十六歳の時に作られた『浄土和讃』観経意との関わりである。

本小論では、『観無量寿経』「序分」の禁父縁と禁母縁の註釈文、特に『観無量寿経集註』の裏面に記された文に注目して、『浄土和讃』観経意との関わりを明らかにしていきたい。

一、禁父縁の註釈文

禁父縁には、次のように註釈文が記されている。

表の凡例（上段）

傍線……………（一）表面。経文の行間に記された註釈文。

二重傍線……………（三）表面。経文の下欄外に記された註釈文。

網掛け……………（四）裏面。経言の真裏の位置に記された註釈文。

波傍線……………（五）裏面。紙の上から下に記された註釈文。

（下段）

かぎ括弧内の太字は『観無量寿経』の本文。
丸括弧内は『親鸞聖人真蹟集成』第七巻の頁数。

<p>『観経四帖疏』「序分義」禁父縁 本文</p>	<p>『観無量寿経集註』裏面註釈文</p>
<p>二就禁父縁中即有其七^⑧ 一從「爾時王舍大城」以下総明起化处此明往古百姓但城中造舍即 為天火所燒若是王家舍宅悉無火近後時百姓共奏於王臣等造宅数为天 火所燒但是王舍悉無火近不知有何所以王告奏人自今以後卿等造宅之 時但言我今為王造舍奏人等各奉王勅帰還造舍更不被燒因此相伝故名 「王舍」言「大城」者此城極大居民九億故道「王舍大城」也言起化 处者即有其二一謂闍王起惡即有禁父母之縁因禁則厭此娑婆願託無憂 之世界二則如来赴請光變為台影現靈儀夫人即求生安樂又傾心請行仏</p>	<p>（一）「此明往古」～「舍大城也」 「爾時王舍大城」裏 （一三五頁）</p>

開三福之因正觀即是定門更顯九章之益為此因緣故名起化処也⁹⁾

二從「有一太子」下至「惡友之教」已來正明闍王悅忽之間信受惡人所悞言「太子」者彰其位也言「阿闍世」者顯其名也又「阿闍世」者乃是西國正音此地往翻名未生怨亦名折指問曰何故名未生怨及名折指也答曰此皆舉昔日因緣故有此名言因緣者元本父王無有子息処処求神竟不能得忽有相師而奏王言臣知山中有一仙人不久捨壽命終已後必當与王作子王聞歡喜此人何時捨命相師答王更經三年始可命終王言我今年老國無繼祀更滿三年何由可待王即遣使入山往請仙人曰大王無子欠無紹繼処処求神困不能得乃有相師瞻見大仙不久捨命与王作子請願大仙垂恩早赴使人受教入山到仙人所具說王請因緣仙人報使者言我更經三年始可命終王勅即赴者是事不可使奉仙教還報大王具述仙意王曰我是一國之主所有人物皆歸屬我今故以礼相屈乃不承我意王更勅使者卿往重請請若不得當即殺之既命終已可不与我作子也使人受勅至仙人所具道王意仙人雖聞使說意亦不受使人奉勅即欲殺之仙人曰卿當語王我命未盡王以心口遣人殺我我若与王作兒者還以心口遣人殺王仙人道此語已即受死既死已即託王宮受生当其日夜夫人即覺有身王聞歡喜天明即喚相師以觀夫人是男是女相師觀已而報王言是兒非女此兒於王有損王曰我之国土皆捨屬之縱有所損吾亦無畏王聞此語憂喜交懷王白夫

(2)「彰其位也」

「太子」裏 (同前)

(3)「顯其名也」

「阿闍世」裏 (同前)

(4)「問曰何故」 「次第教之」

乃至

「阿難如是」 「友之教也」

「欣淨緣」教觀於清淨業処」

裏

禁母緣「止不害母」裏

(一二九、一三二頁)

人言吾共夫人私自平章相師道兒於吾有損夫人待生之日在高樓上当天井中生之勿令人承接落在於地豈容不死也吾亦無憂聲亦不露夫人即可王之計及其生時一如前法生已墮地命便不斷唯損手小指因即外人同唱言折指太子也言未生怨者此因提婆達多起惡妬之心故對彼太子顯發昔日惡緣云何妬心而起惡緣提婆惡性為人兇猛雖復出家恒常妬妬名聞利養然父王是仏檀越於一時中多將供養奉上如來謂金銀七宝名衣衣服百味菓食等一一色色皆五百車香華伎樂百千万衆讚歎圍繞送向仏會施仏及僧時調達見已妬心更盛即向舍利弗所求學身通尊者語言人者且學四念処不須學身通也既請不遂心更向余尊者辺求乃至五百弟子等悉無人教皆遺學四念処請不得已遂向阿難辺學語阿難言汝是我弟我欲學通一一次第教我然阿難雖得初果未証他心不知阿兄私密學通欲於仏所起於惡計阿難遂即喚向靜処次第教之跏趺正坐先教將心拳身似動想去地一分一寸想一尺一丈想至舍作空無碍想直過上空中想還撰心下至本坐処想次將身拳心初時去地一分一寸等亦如前法以身拳心以心拳身亦隨既上空至已還撰取身下至本坐処次想身心合拳還同前法一分一寸等周而復始次想身心入一切質碍色境中作不質碍想次想一切山河大地等色入自身中如空無碍不見色相次想自身或大徧滿虛空坐臥自在或坐或臥以手提動日月或作小身入微塵中一切皆作無碍想阿難如是次第教已時

調達既受得法已即別向靜處七日七夜一心專注即得身通一切自在皆得成就既得通已即向太子殿前在於空中現大神變身上出火身下出水或左或出水右或出水或現大身或現小身或坐臥空中隨意自在太子見已問左右曰此是何人左右答太子言此是尊者提婆太子聞已心大歡喜遂即舉手喚言尊者何不下來提婆既見喚已即化作嬰兒直向太子膝上太子即抱鳴口弄之又唾口中嬰兒遂咽之須臾還復本身太子既見提婆種種神變轉加敬重既見太子心敬重已即說父王供養因緣色別五百乘車載向仏所奉仏及僧太子聞已即語尊者弟子亦能備具色各五百車供養尊者及施衆僧可不如彼也提婆言太子此意大善自此已後大得供養心轉高慢譬如杖打惡狗鼻轉增狗惡此亦如是太子今將利養之杖打提婆貪心狗鼻轉加惡盛因此破僧改仏法戒教戒不同待仏普為凡聖大衆說法之時即來會中從仏索於徒衆并諸法藏盡付屬我世尊年將老邁宜可就靜內自將養一切大衆聞提婆此語憐爾迭互相看甚生驚怪爾時世尊即對大衆語提婆言舍利目連等即大法將我尚不將仏法付屬況汝痴人食唾者乎時提婆聞仏對衆毀辱由如毒箭入心更發痴狂之意藉此因緣即向太子所共論惡計太子既見尊者敬心承問言尊者今日顏色憔悴不同往昔提婆答曰我今憔悴正為太子也太子敬問尊者為何意也提婆即答云太子知不世尊年老無所堪任當可除之我自作仏父王年老亦可除之太子自坐正位新王新仏治化豈

不樂乎太子聞之極大瞋怒勿作是說又言太子莫瞋父王於太子全無恩德初欲生太子時父王即遣夫人在百尺樓上当天井中生即望墮地令死正以太子福力故命根不斷但損小指若不信者自看小指足以為驗太子既聞此語更重審言「實爾已不提婆答言此若不實我可故來作漫語也」因此語已遂即信用提婆惡見之計故道「隨順調達惡友之教」也

三從「收執父王」下至「一不得往」已來正明父王為子幽禁此明闇世取提婆之惡計頓捨父子之情非直失於罔極之恩逆響因茲滿路忽掩王身曰收既得不捨曰執故名「收執」也言「父」者別顯親之極也「王」者彰其位也「頻婆」者彰其名也言「幽閉七重室內」者所為既重事亦非輕不可淺禁人間全無守護但以王之宮閣理絕外人唯有群臣則久來承奉若不嚴制恐有情通故使內外絕交閉在七重之內也

四從「国大夫人」下至「密以上王」已來正明夫人密奉王食言「国大夫人」者此明最大也言「夫人」者標其位也言「韋提」者彰其名也言「恭敬大王」者此明夫人既見王身被禁門戶極難音信不通恐絕王身命遂即香湯滲浴令身清淨即取酥蜜先塗其身後取乾麁始安酥蜜之上即著淨衣覆之在外衣上始著瓔珞如常服法令外人不怪又取瓔珞孔一頭以蠟塞之一頭孔中盛蒲桃漿滿已還塞但是瓔珞悉皆如此莊嚴既竟徐步入宮与王相見問曰諸臣奉勅不許見王未審夫人門家不制放令得入者有何

(5)「言「父」者別顯親之極也」

〔「父王頻婆娑羅」裏

(一三五頁)

(6)「王」者彰其位也」

〔「父王頻婆娑羅」裏

(同前)

(7)「頻婆」者彰其名也」

〔「父王頻婆娑羅」裏

(同前)

(8)「問曰諸臣」与王相見」

意也。答曰：諸臣身異，復是外人，恐有情通，致使嚴加重制。又夫人者，身是女人，心無異計，与王宿緣業重，久近夫妻，別体同心，致使人無外慮，是以得入与王相見。

五從「爾時大王食麴」下至「授我八戒」已來，正明父王因禁請法，此明夫人既見王已，即刮取身上酥麴團，授与王王得，即食食麴，既竟，即於宮內夫人求得淨水与王漱口，淨口已竟，不可虛引，時朝心無所寄，是以虔恭合掌，回面向於耆闍致敬，如來請求加護，此明身業敬亦通有意業也。而作是言：「已下正明口業，請亦通有意業也。」言「大目連是吾親友」者，有其二意，但目連在俗，是王別親，既得出家，即是門師，往來宮閣都無障礙，然在俗為親，出家名友，故名「親友」也。言「願興慈悲，授我八戒」者，此明父王敬法情深，重人過已，若未逢幽難，奉請仏僧不足為難，今既被囚，無由致屈，是以但請目連受於八戒也。問曰：父王遙敬先礼世尊及其受戒，即請目連有何意？也答曰：凡聖極尊，無過於仏，傾心發願，即先礼大師，戒是小緣，是以唯請目連來授。然王意者，貴存得戒，即是義周何勞迂屈世尊也。問曰：如來戒法乃有無量，父王唯請八戒，不請余也。答曰：余戒稍寬，時節長遠，恐畏中間失念，流轉生死，其八戒者，如余仏經說在家人持出家戒，此戒持心極細，極急，何意然者？但時節稍促，唯限一日一夜作法，即捨云何？知此戒用心行細，如戒文中具顯云：仏子，從今旦至明旦，一日一夜如諸仏不殺生，能持不答言，能持第二又云：仏子，從今旦

〔制諸群臣一不得往〕裏

〔同前〕

〔9〕問曰：父王〕〕〔日日受之〕

〔願興慈悲，授我八戒〕裏

〔一三四頁〕

至明旦一日一夜如諸仏不偷盜不行姪不妄語不飲酒不得脂粉塗身不得歌舞唱伎及往觀聽不得上高大牀此上八是戒非齊不得過中食此一是齊非戒此等諸戒皆引諸仏為証何以故唯仏与仏正習俱尽除仏已還惡習等由在是故不引為証也是以得知此戒用心起行極是細急又此戒仏說有八種勝法若人一日一夜具持不犯所得功德超過人天二乘境界如經広說有斯益故致使父王日日受之

六從「時大目連」下至「為王說法」已來明其父王因請得蒙聖法此明目連得他心智遙知父王請意即發神通如彈指頃到於王所又恐人不識神通之相故引快鷹為喻然目連通力一念之頃繞四天下百千之帀豈得与鷹為類也如是比校乃有衆多不可具引如『賢愚經』具說言「日日如是授王八戒」者此明父王延命致使目連數來受戒問曰八戒既言勝者一受即足何須日日受之答曰山不厭高海不厭深刀不厭利日不厭明人不厭善罪不厭除賢不厭德仏不厭聖然王意者既被囚禁更不蒙進止念念之中畏人喚殺為此晝夜傾心仰憑八戒望欲積善增高擬資來業言「世尊亦遣富樓那為王說法」者此明世尊慈悲意重愍念王身忽遇囚勞恐生憂悴然富樓那者於聖弟子中最能說法善有方便開發人心為此因緣如來發遣為王說法以除憂惱

七從「如是時間」下至「顏色和悅」已來正明父王因食聞法多日不

(10)「問曰八戒」――「擬資來業」

「世尊亦遣尊者富樓那為

王說法」裏(同前)「

(11)「此明世尊」――「以除憂惱」

「世尊亦遣尊者富樓那為

王說法」裏(同前)「

死此正明夫人多時奉食以除飢渴二聖又以戒法內資善開王意食能延命
戒法養神失苦亡憂致使顏容和悅也

上來雖有七句不同広明禁父縁竟

〔真宗聖教全書〕一・四六八～四七六頁

右の表からは、以下の三点が確認できる。

- ・すべての問答を、裏面の上から下に記している。
- ・(4)の問答は、禁父縁に記さず、欣浄縁の裏面から記している。
- ・(10)と(11)の註釈文の順序が逆転している。これは、経言の真裏の位置に記すことを優先するためか。

二、禁母縁の註釈文

禁母縁には、次のように註釈文が記されている。

<p>『観経四帖疏』『序分義』禁母縁 本文</p>	<p>『観無量寿経集註』裏面註釈文</p>
<p>三就禁母縁中即有其八¹⁰⁾ 一從「時阿闍世」下至「由存在耶」已來正明問父音信此明闍王禁父日数既多人交総絶水食不通二七有余命応終也作是念已即到宮門問</p>	

守門者父王今者猶存在耶問曰若人食一食之飯限至七日即死父王以經三七計合命斷無疑闍王何以不直問曰門家父王今者死竟耶云何致疑而問猶存在者有何意也答曰此是闍王意密問也但以万基之主舉動不可隨宜父王既是天性情親無容言問死恐失在當時以成譏過但以內心標死口問在者為欲息永惡逆之声也

二從「時守門人白言」下至「不可禁制」已來正明門家以事具答此明闍世前問父王在者今次門家奉答「白言大王國大夫人」已下正明夫人密奉王食王既得食食能延命雖經多日父命猶存此乃夫人之意非是門家之過問曰夫人奉食身上塗麴衣下密覆出入往還無人得見何故門家具顯夫人奉食之事答曰一切私密不可久行縱巧牢藏事還彰露父王既禁在宮內夫人日日往還若不密持麴食王命無由得活今言密者望門家述夫人意也夫人謂密外人不知不其門家尽以覺之今既事窮無由相隱是以一一具向王說言「沙門目連」已下正明二聖騰空來去不由門路日日往還為王說法大王當知夫人進食先不奉王教所以不敢遮約二聖乘空此亦不猶門制也

三從「時阿闍世聞此語」下至「欲害其母」已來正明世王瞋怒此明闍王既聞門家分疏已即於夫人心起惡怒口陳惡辭又起三業逆三業惡罵父母為賊名口業逆罵沙門者名口業惡執劍殺母名身業逆身口所為以心

為主即名意業逆又復前方便為惡後正行為逆言「我母是賊」已下正明口出惡辭云何罵母為賊賊之伴也但闍王元心致怨於父恨不早終母乃私為進糧故令不死是故罵言我母是賊賊之伴也言「沙門惡人」已下此明闍世瞋母進食復聞沙門与王來去致使更發瞋心故云有何咒術而令惡王多日不死言「即執利劍」已下此明世王瞋盛逆及於母何其痛哉撮頭擬劍身命頓在須臾慈母合掌曲身低頭就兒之手夫人爾時熱汗徧流心神悶絕嗚呼哀哉恍惚之間逢斯苦難

四從「時有一臣名曰月光」下至「却行而退」已來正明二臣切諫不聽此明二臣乃是国之輔相立政之綱紀望得万国揚名八方防習忽見闍王起於勃逆執劍欲殺其母不忍見斯惡事遂与耆婆犯顏設諫也言「時」者當闍王欲殺母時也言「有一大臣」者彰其位也言「月光」者彰其名也言「聰明多智」者彰其德也言「及与耆婆」者耆婆亦是父王之子奈女之兒忽見家兄於母起逆遂与月光同諫言「為王作礼」者凡欲諮諫大人之法要須設拜以表身敬今此二臣亦爾先設身敬覺動王心斂手曲躬方陳本意也又「白言大王」者此明月光正欲陳辭望得闍王開心聽攬為此因緣故須先白言「臣聞毘陀論經說」者此明広引古今書史歷帝之文記古人云言不閑典君子所慚今既諫事不輕豈可虛言妄說言「劫初已來」者彰其時也言「有諸惡王」者此明綏標非礼暴逆之人也言「貪国位故」

(1)「正明口出」～「賊之伴也」

「我母是賊」裏

(一三三頁)

(2)「此明闍世」～「多日不死」

「沙門惡人」裏(同前)

(3)「此明二臣」～「顏設諫也」

「時有一臣名曰月光」裏

(同前)

(4)「彰其名也」

「月光」裏(一二二頁)

者此明非意所貪奪父座也言「殺害其父」者此明既於父起惡不可久留故須斷命也言「一万八千」者此明王今殺父与彼類同也言「未曾聞有無道害母」者此明自古至今害父取位史籍良談貪國殺母都無記處若論劫初已來惡王貪國但殺其父不加慈母此則引古異今大王今者貪國殺父父則有位可貪可使類同於古母即無位可求橫加逆害是以將今異昔也言「王今為此殺母者污刹利種」也言「刹利」者乃是四姓高元王者之種代代相承豈同凡碎言「臣不忍聞」者見王起惡損辱宗親惡声流布我之性望耻慚無地言「是旃陀羅」者乃是四姓之下流也此乃性懷伺惡不閑仁義雖著人皮行同禽獸王居上族押臨万基之主今既起惡加恩与彼下流何異也言「不宜住此」者即有二義一者王今造惡不存風礼京邑神州豈遣旃陀羅為主也此即擯出宮城意也二者王雖在國損我宗親不如遠擯他方永絕無聞之地故云「不宜住此」也言「時二大臣說此語」已下此明二臣直諫切語極麤廣引古今望得王心開悟言「以手按劍」者臣自按手中劍也問曰諫辭麤惡不避犯顏君臣之義既乖何以不回身直去乃言「却行而退」也答曰麤言雖逆王望息害母之心又恐瞋毒未除繫劍危己是以按劍自防却行而退

五從「時阿闍世驚怖」下至「汝不為我耶」已來正明世王生怖此明闍世既見二臣諫辭麤切又觀按劍而去恐臣背我向彼父王更生異計致使

(5)「此明自古」↪「今異昔也」

「未曾聞有無道害母」裏

(同前)

(6)「見王起惡」↪「耻慚無地」

「臣不忍聞」裏(同前)

(7)「乃是四姓」↪「流何異也」

「是旃陀羅」裏(同前)

(8)「臣自按手」↪「却行而退」

「以手按劍却行而退」裏

(同前)

情地不安故称惶懼彼既捨我不知為誰心疑不決遂即口問審之故云「耆婆汝不為我也」言「耆婆」者是王之弟也古人云家有衰禍非親不救汝既是我弟者豈同月光也

六從「耆婆白言」下至「慎莫害母」已来明二臣重諫此明耆婆実答大王若欲得我等為相者願勿害母也此直諫竟

七從「王聞此語」下至「止不害母」已来正明闇王受諫放母殘命此明世王既得耆婆諫已心生悔恨愧前所造即向二臣求哀乞命因即放母脱於死難手中之劍還歸本匣

八從「勅語内官」下至「不令復出」已来明其世王余曠禁母此明世王雖受臣諫放母猶有余曠不令在外勅語内官閉置深宮更莫令出与父王相見

上來雖有八句不同広明禁母緣竟

〔真宗聖教全書〕一・四七七〜四八一頁

右の表からは、以下の二点が確認できる。

- ・ 註釈文は、経文の行間と経言の真裏の位置に限る。
 - ・ 八つの段落に分けられる禁母縁の中で、経言の真裏の註釈文は、第三と第四に限る。
- 第三は、

三に「時阿闍世聞此語」より下「欲害其母」に至るこのかたは、まさしく世王の瞋怒を明かす。

（『真宗聖教全書』一・四七八頁）

とあるように、阿闍世の母親に対する怒りを明らかにしている。『観無量寿経』で言えは、次の文である。

時に阿闍世、この語を聞き已りて、その母を怒りて曰わまう、「我が母はこれ賊なり、賊と伴たり。沙門は悪人なり。幻惑の呪術をもつて、この悪王をして多日、死せざらしむ。」すなわち利剣を執りて、その母を害せんとす。

（『真宗聖典』九〇頁）

第四は、

四に「時有一臣名曰月光」より下「却行而退」に至るこのかたは、まさしく二臣切諫して聴さざることを明かす。

（『真宗聖教全書』一・四七八頁）

とあるように、二人の大臣（月光と耆婆）が諫めて、母親殺しをゆるさないことを明らかにしている。『観無量寿経』で言えは、次の文である。

時に一の臣あり、名をば月光と曰う。聡明にして多智なり。および耆婆と、王のために、礼を作して白して言さく、「大王、臣聞く、『毘陀論経』に説かく、劫初よりこのかた、もろもろの悪王ありて、国位を貪るがゆえに、その父を殺害せること一万八千なり。未だむかしにも聞かず、無道に母を害することあるをば。王いまこの殺逆の事をなさば、刹利種を汚してん。臣聞くに忍びず。これ梅陀羅なり。宜しく此に住すべからず。」時に二の大臣、この語を説き竟りて、手をもって剣を按えて、却行して退く。

（『真宗聖典』九〇～九一頁）

三、禁父縁・禁母縁の註釈文と『浄土和讃』観經意

禁父縁の註釈文で注目したいのは、「阿闍世」の名前が「未生怨」、または、「折指」と言われる理由を問うた（4）である。前述したように、註釈文は経文に関わるものであるため、基本的には経文の近くに配置されている。しかし、親鸞は禁父縁（4）を、禁父縁の「阿闍世」^⑪の裏面ではなく、欣浄縁の「教我観於清浄業处（我に清浄の業处を觀ぜしむることを教えたまえ）」^⑫の裏面から禁母縁の「止不害母（止りて母を害せず）」^⑬の裏面にかけて記している。

欣浄縁には、

時に韋提希、仏に白して言さく、「世尊、このもろもろの仏土、また清浄にしてみな光明ありといえども、我いま極樂世界の阿弥陀仏の所に生まれんと樂う。唯、願わくは世尊、我に思惟を教えたまえ、我に正受を教えたまえ。」
（『真宗聖典』九三頁）

とあるように、韋提希が極樂浄土を願うことが説かれている。この欣浄縁の文をもとに作られたのが、『浄土和讃』観經意の第一首目である。

恩徳広大釈迦如来 韋提夫人に勅してぞ

光台現国のそのなかに 安樂世界をえらばしむ

（『真宗聖典』四八五頁）

第二首目は、禁父縁をもとにした和讃である。

頻婆娑羅王勅せしめ 宿因その期をまたずして

仙人殺害のむくいには 七重のむろにとじられき

（同前）

これは、『観無量寿經集註』において欣浄縁の裏面に記された禁父縁（4）の文がもとになっている。

この禁父縁（４）の文の直前に記されるのが、禁母縁（１）（８）の文である。そして、禁母縁（１）（８）の文をもとにして作られたのが、『浄土和讃』観經意の第三首目から第五首目である。

阿闍世王は瞋怒して 我母是賊としめしてぞ

無道に母を害せんと つるぎをぬきてむかいける（禁母縁（１）（５））

耆婆月光ねんごろに 是旃陀羅とはじしめて

不宜住此と奏してぞ 闍王の逆心いさめける（禁母縁（３）（４）（７））

耆婆大臣おさえてぞ 却行而退せしめつつ

闍王つるぎをすてしめて 韋提をみやに禁じける（禁母縁（８））

（『真宗聖典』四八五頁、傍線・丸括弧内筆者）

「我母是賊」は禁母縁（１）、「是旃陀羅」は禁母縁（７）、「却行而退」は禁母縁（８）に関わるものであるが、丸括弧内に示した文も含めて作られていると考えられる。

さて、『観無量寿經』「序分」は、次のような次第である。

一 証信序「如是我聞」（『真宗聖典』八九頁）

二 発起序「一時」～「云何見極樂世界」（『真宗聖典』八九～九五頁）

（一）化前序「一時仏在」～「法王子而為上首」（『真宗聖典』八九頁）

（二）禁父縁「王舎大城」～「顔色和悦」（『真宗聖典』八九～九〇頁）

（三）禁母縁「時阿闍世」～「不令復出」（『真宗聖典』九〇～九一頁）

- (四) 厭苦縁「時韋提希被幽閉」→「共為眷属」(『真宗聖典』九一～九二頁)
- (五) 欣浄縁「唯願為我広説」→「教我正受」(『真宗聖典』九二～九三頁)
- (六) 散善顕行縁「爾時世尊即便微笑」→「浄業正因」(『真宗聖典』九三～九四頁)
- (七) 定善示観縁「仏告阿難等諦聴」→「云何得見極楽国土」(『真宗聖典』九四～九五頁)

〔『観経四帖疏』「序分義」・『真宗聖教全書』一・四六四～四六五頁参照〕

この次第から分かるように、禁父縁、禁母縁の後に欣浄縁が説かれている。しかし、親鸞は『浄土和讃』において、欣浄縁をもとにした和讃を第一首目に配置し、その後に禁父縁(第二首)、禁母縁(第三首、第五首)をもとにした和讃を展開している。つまり、『浄土和讃』観経意は、『観無量寿経』の経文の順序に沿って作られているわけではない。これによって親鸞は、釈尊が韋提希に「安樂世界をえらばし」めることを明らかにするのが『観無量寿経』である、ということを示していると考えられる¹⁴⁾。

このように、『浄土和讃』観経意の第一首目からの展開は、『観無量寿経集註』において欣浄縁の経文の裏面に禁父縁(4)が記され、その直前に禁母縁(1)→(8)が記されることに基づくものではないだろうか。これによって、釈尊が韋提希に安樂世界を選ばせることと、その背景を明らかにしていると考えられるのである¹⁵⁾。そのように考えることができるならば、七十六歳の時に作られた『浄土和讃』観経意には、若き親鸞の学びの一端が示されていると見ることができよう。

おわりに

『観無量寿経集註』には、善導の『観經四帖疏』を中心に註釈文が記されている。これは、「はじめに」でも述べたように、『大無量寿経』に説かれる阿弥陀仏の本願に基づく『観無量寿経』の学びである。親鸞は、師法然との出遇いの意味を、

しかるに愚禿釈の鸞、建仁辛の酉の曆、雜行を棄てて本願に帰す。

（『教行信証』「化身土卷」・『真宗聖典』三九九頁）
と述べている。阿弥陀仏の本願に基づく学びは、親鸞教学を一貫するものである。その意味で、若き親鸞が書き記した『観無量寿経集註』は、主著『教行信証』をはじめとする様々な著作の基礎となるものと言えるのではないだろうか。

今回は、『観無量寿経集註』について、裏面に記された禁父縁と禁母縁の註釈文に注目して考察した。『観無量寿経集註』裏面の禁父縁（4）と禁母縁（1）（8）の註釈文は、すべてではないが『浄土和讃』観經意の第二首目から第五首目の内容と重なっている。このことを踏まえると、親鸞は「序分」に説かれる韋提希の欣浄の背景を、禁父縁と禁母縁に見ていると言えるのではないだろうか。その意味で、『観無量寿経集註』の註釈文、またその位置を考察していくことで、親鸞の『観無量寿経』観が明確になるのではないかと考えている。

本小論では、多くの課題が残った。例えば、『観無量寿経集註』の表面の註釈文について、禁父縁のすべての問答を『観無量寿経集註』裏面の上から下に記していること、また、『浄土和讃』観經意と対応しない註釈文のことなどであるが、これらのことについては今後の課題としたい。

※筆者は、本学の「人權論」に関わる教員と、九州教区の解放運動推進協議会・部落差別問題部会委員で、二〇二一年三月から月一回のペースで「是旃陀羅」に関する学習会を行ってきた。学習会では、筆者が発題し、それをもとに議論をしている。今回の「研究ノート」は、その発題の一端を原稿化したものである。

【註】

①九州大谷短期大学仏教学科。

②『観無量寿経集註』と『阿弥陀経集註』は、一九四三(昭和十八)年に西本願寺より発見された。翌年には、『観無量寿経集註 附阿弥陀経集註』と題した影印本が出版されているが、その解説には次のように述べられている。

この度裏書と見返しとを合せて六十九枚の写真を撮影すると共に、虫損の部分に修理を加へ、二経を分離して両巻とし、新に表紙を加へた為、大に旧観を改めることになった。

(禿氏祐祥「親鸞聖人御自筆 観無量寿経集註(附阿弥陀経集註)解説」一頁、傍線筆者)
③『阿弥陀経集註』には、善導の『法事讃』を中心に、『観念法門』、元照の『阿弥陀経義疏』、『称讃浄土経』が記されている。

④『親鸞聖人真蹟集成』七・四一三頁参照。

⑤小川貫弑「観阿弥陀経集註について」(『印度学仏教学研究』第九卷第一号(一七)・二九三頁)。

⑥『親鸞聖人真蹟集成』七・四一一頁。

- ⑦『親鸞聖人真蹟集成』七・四二一頁参照。
- ⑧經文の行間に記された註釈文は、『親鸞聖人真蹟集成』七・二～四頁。
- ⑨經文の下欄外に記された註釈文は、『親鸞聖人真蹟集成』七・八頁。
- ⑩經文の行間に記された註釈文は、『親鸞聖人真蹟集成』七・四～六頁。
- ⑪『観無量寿経』・『真宗聖典』八九頁、『観無量寿経集註』表・『親鸞聖人真蹟集成』七・二頁。
- ⑫『観無量寿経』・『真宗聖典』九三頁、『観無量寿経集註』表・『親鸞聖人真蹟集成』七・八頁。
- ⑬『観無量寿経』・『真宗聖典』九一頁、『観無量寿経集註』表・『親鸞聖人真蹟集成』七・六頁。
- ⑭廣瀬杲『興真宗 観経玄義分試解』二〇九頁参照。
- ⑮拙稿「親鸞教学における「是梅陀羅」」（『教化研究』一六四）参照。